

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
 大学院生研究
 2007年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院		文学研究科	比較文明学 専攻	
指導教員	所属・職名		氏名		
	文学研究科比較文明学専攻・教授		北山晴一 印		
自然・人文の別	自然	・	<input type="checkbox"/> 人文		
			個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同 名
研究課題名	主体としての身体の可能性―「産まない」身体を手がかりに―				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科比較文明学専攻 博士課程後期課程2年		川野佐江子 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
研究期間	2007年度				
研究経費	200千円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、「主体」の在処についてアプローチしようとする一環として<産まない>身体という概念を提示しようとするものである。これは生産/再生産を中心原理とする近代社会におけるアイデンティティへの問いを、<産まない>つまり生殖の外(<外-生殖>)にある身体の位置づけとともに思考しようとする試論である。

そのため今回、本研究では、2つのテーマについて思考した。その第1は、<産まない>=<外-生殖>についての概念の提示である。第2は第1の考察中に生じた問題である生殖と世代間継承の問題である。これら2点について、身体というキーワードを絡めて提示した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入)

[生殖性(Generativity)] [身体] [アイデンティティ]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、「わたし」は「主体」として「自己」を認知できるのか、という究極的な問いを基底に持っている。そこへのアプローチには、「わたし」「主体」「自己」とは何かという探求から不可避である。モダンにおいて、それらはア・プリオリな前提として疑われることはなかったが、ポスト・モダン以降その存在は他者との関係性において存在するものとして提示思考されるものとなっている。つまり、自己は他者なくしては認知することができず、そこでは自己と他者との境界が不明瞭になる。そしてついにその境界が消失した時、アイデンティティなるものは語る事が可能なのか、語ることはもはや不可能で、自他間の永遠のスパイラルに絡みとられる運命にあるではないか。そこに本研究の問いの基底がある。とはいえ、自己・主体・アイデンティティを語る当面の基点として、今ここにあるであろう「身体」にまつわる切り口から議論を始めてみよう、それが本研究の背景にある。

その際、身体をどういう位置づけで扱うかを簡単に述べておく。本研究では身体を「場」と捉えることとする。人間が思考し行動するとき、制度的な有り様と生物的有り様との両義的な状況に陥ることは生活の中で簡単に発見することができる。この両義性は双方からの相関関係によって生じるものでもあり、その関係性が発生する所が身体という場であると捉える。つまり身体は、制度的なるものと生物的なるものがせめぎ合いそれを表象する「場」として捉えることとする。

1. <外-生殖>の身体とは

本研究は、<産まない>身体という概念を提示する。これは<産まない>つまり生殖の外(<外-生殖>)にある身体を浮かび上がらせることで、生産性や再生産性を命題とする近代社会に生きる人間の構築された主体の有り様を現出させようというねらいがある。それにより、現在問題化されている少子高齢化社会での QOL に何らかの示唆が与えられるものとする。

1- (1) Generativity という概念

Generativity とはエリック・H・エリクソンの造語で生殖性と訳されている。エイジング研究の社会学者小倉泰嗣は「もはや子どもを産み育てるという限定された生殖性(=再生産)が、包括的なジェネラティヴィティの表現になる時代ではない」として、再帰的近代としての高齢化社会を生きる人間の在り方を示唆している。小倉は、生産や再生産を中心原理として進んできた近代社会の理念が、生産しないもの-「老い」や「老後」-を悲惨なものとしてイメージするのは、近代産業社会の人間観に囚われているからであり、それを克服するためにジェネラティヴィティの概念(生き方の創造、歴史の創造という「命の繋げ方」)によって自らの生を意味づけ、自己をこの世に位置づける新たな展望を切り拓くことができると論じる。

このように見えてくると、生産至上主義社会におけるこのジェネラティヴィティの概念は生産/再生産主義から離れた生き方をすることになった者(せざるを得なくなった者)にとっての拠り所となる地平として提示できるものと考えられる。

1- (2) Reproduction し(てい)ない人へのインタビュー調査より

Generativity の概念は、なるほど生産や再生産活動をしていない者にとって、それまでの生きづらさや疎外感などから解放させてくれる地平となるだろう。小倉はエイジング研究者として高齢化社会での生き方についてアプローチしている。同様に、生産/再生産の社会から問題化されているのは少子化である。つまり、子どもを産むという直接生殖という再生産の問題においてもジェネラティヴィティの概念は可能であろうか。今回、その状況を知る意味で、数人の現在子どもを産まない男女にインタビュー調査を試みた。

今回取り上げる対象者は 50 代未婚男性、40 代未婚女性、30 代未婚女性、の 3 人である。

研究成果の概要 つづき

いずれも希望としては将来は自分の子どもを持ちたいと願っており、その理由は親に対して申し訳ない、というようなものが目立った。つまり、欲しい子どもは実子であり、親から引き継いだ血を自分で途絶えさせるのはいかがなものか、という思いであった。実子にこだわるのは養子制度や里親制度が現代日本であまり定着しない理由とも関わりがあるだろうが、今回は踏みこまないでおく。この「実子へのこだわり」はインタビュー調査での再認識でもあり、この再認識が研究の基底へのアプローチとして次節 2 へとつながるものとなった。

インタビューでは、「弟に子どもがいるから、自分はまあ、このままで。なるようになるかな。」や、「(自分は)一人っ子だから、やっぱりこのままでは親に悪い。」「親がもう年をとってしまっているから、早く安心させなくちゃとは思いますが」などという血縁関係を目下の問題点として挙げる場合が多かった。

子どもを持つという意味での再生産に対して、生き方の創造、歴史の創造という「命の繋げ方」の概念としてのジェネラティヴィティは、「結果として子どもが持てなかったら考える(思いつく)生き方」であることが今回のインタビュー調査で見えたことである。高齢化は誰もが避けられない現実であるが、「子どもがいない」という状態は「誰もが必然的に陥る状態ではない(異常事態である)」からである。特に、血族の継承という問題は重要視され、自己を垂直に流れる時間のなかに位置づけ、それを継承し次世代へ受け渡す役割を持つ者として意味づけをしている。しかし、継承し世代を繋ぐという考え方はジェネラティヴィティそのものなのではないだろうか。

何を受け取り受け渡さな「ければならない」のか、それこそがジェネラティヴィティの概念の本質に内包される近代産業社会特有の拘束なのではないだろうか。

1 - (3) <外-生殖>の身体

この生殖性に内包される近代産業社会特有の拘束から距離を置くことはできないのか。報告者はこの「繋がるべし」という拘束自体に違和感を持つ。誰が何とどのように繋がらなければならないのか、そしてその「繋がるべし」を誰が誰に要請しているのか、そういう問いが生じる。生殖性の切り口で社会やそこに生きる人間を語ろうとするならば、当然生殖性を前提にした議論のみ可能となる。

そこで別途措定したいのが<外-生殖>という概念である。生殖とは別次元の位置に身体を置くことで、近代的なるものから距離をおいたフラットな主体を措定できる。生殖から外に出ることで、性的なるものによって主張されてきたフェミニズムやジェンダーの理論の枠とは別の、フラットな人間そのものへのアプローチが可能となる。生殖の外にある場<身体>を措定することで「主体」や「わたし」や「自己」についての水平な議論が可能となることを提示したい。

2. 世代間継承の問題

本研究の途上で派生的に生じた問題は世代間継承に向かう問いであった。インタビュー調査でも見られたように、多くの人や社会には、ジェネラティヴィティの概念をほとんど疑うことなく受容している日常がある。これは、垂直的時間の流れの中に自己を位置づけ意味づけることがアイデンティファイの作法の一つであり、「自然なこと」として受け入れられているからであろう。一方、時間は直線的に流れるだけでなく、通過儀礼の還暦などの例のように、環状であるとする考え方も知られている。環境問題などからも、産業界も再生産(リサイクル)へとシフトしていることなど、ますます「繋がり」を要請する傾向が強まっている。伝統や歴史を強調した政治的社会的産動的動きが高まるなかで、自己の意味づけが求められている。主体や自己について思考するとき、そもそも主体や自己が不安的で確固たる所在が掴めないあやふやな存在であることそのことを、快と感じることは否定されるべきことなのか。この主題は、冒頭にのべた本研究の基底へ向かうテーマとして今後も深く研究していくこととする。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ④学会報告 第55回関東社会学会大会
一般報告「「産まない」身体の在処—少子化対策関連データからの一考察」

立教大学ジェンダーフォーラム主催
第43回ジェンダーセッション「生活世界とジェンダー」
話題提供 「テラード・スーツとジェンダー」